

# 図書館だより

北海学園大学附属図書館報 第26巻3号(通巻171号) 2004.10.21

vol.26

NO. 3

Bulletin of the Hokkai-Gakuen University Library

桑原隆司

## 2 ローマ建築と月面基地



二千年近く前に作られたコロッセウムのコンクリート断面

岩崎まさみ

## 3 図書館の一日：私の学生時代

樽見弘紀

## 4 時間持ちだった頃

佐藤 淳

## 5 「アヴェロンの野生児」のメタ話

## 6 図書館レポート 蔵書検索 (OPAC) のご案内

太田和宏

## 8 全集を読む楽しみ

編集後記

# ローマ建築

と

# 月面基地

文＝桑原隆司

(くわはら たかし/工学部教授)

今から二十数年前、私が三十代の頃の話になるが、アメリカのウイスコンシン州で自動車関連の企業に勤める（現在は、現地企業で社長を務めている）私の中学時代からの友人であるKatu TODA（遠田桂憲）氏から、『一冊の本』が送られてきた。

「こちらで最近出版された本だが、素晴らしい本のようなので君に贈る。」とのメッセージを添えて送られてきた本は、「The World's Great Architecture — From the Pyramids to Modern Times」(The Hamlyn Publishing Group Limited, USA, 1980)で、特にギリシャ・ローマ建築の詳細などについては、当時の日本の図書ではなかなか入手出来ない詳しい情報が盛りだくさんで、時が過ぎるのを忘れて読み耽った。

その後、ヨーロッパを旅行する際、ギリシャ・ローマ建築を観察する中で、今から二千年近く前（A.D.70-82）に建設されたコロセウムで使用されたコンクリートに興味を持ち、そのコンクリートの状態を記録した。

その後、日本国内で「日本の建築物の寿命が、海外の建築物に比べて短すぎる。」という社会的批判が起き、また、原子力発電などに伴う放射性廃棄物を長期間安全に保存する技術が国家的課題となる中、良くも悪しくもコンクリートが注目を浴びようになり、長寿命コンクリートの研究が将来に向けた研究課題となった。そこで、実際に二千年近く経過した実績があるコロセウムのコンクリートが生きた教材として注目され、日本国内からも視察団が派遣されるようになり、それらの方々と、友人から贈られた『一冊の本』がきっかけで長寿命コンクリートの研究にも取り組んでいた私との交流が始まった。

また、人類の宇宙開発が進む中、地球に最も近い「月」に人類が活動するための基地を作る構想がアメリカや日本などで検討されるようになり、月面基地建設のための基幹材料として、月面にある岩石を利用して作る月面コンクリートが注目されるようになった。そこで、無重力の月面でどのようにして安全で長寿命なコンクリートを作るかが問題となり、長寿命なコンクリート技術



月面コンクリートで使用が検討されている月の石

については、過去の遺産であるローマ建築と将来の課題である月面基地建設とが、研究的、技術的交流を行うことになった。また、コンクリート技術の研究などを通して、私と月面基地建設に取り組む研究者との交流も始まった。

今から遥か二千年近く前にローマ建築のコンクリートを作っていた技術者と、将来月面で基地建設のためのコンクリート作りなどに取り組むであろう若者たちが、コンクリートや建設技術などを通してしっかりとつながっていることを考えると、時代を超越したロマンを感じ、若い学生諸君の将来の活躍を大いに期待する次第である。

# 図書館の一日：私の学生時代

文＝岩崎まさみ

(いわさき まさみ／人文学部教授)

学生の皆さんにとって図書館はどのような場所なのだろうか？ 大学・大学院のほとんどを北米で過ごした私にとって、図書館は最も心の落ち着く安らぎの場所である。振りかえると15年ほどの留学生活の中で、その半分ほどの時間を図書館で過ごしたと言えるだろう。どの図書館も朝の6時には開館し、早いところで12時、遅いところでは夜の2時に閉館する。つまり私の日課は図書館の開館時間に始まり、閉館時間に終わったと言える。

朝は誰よりも早く図書館に出かけ、3階あたりの隅の静かな場所で空が見える机を確保するのが朝の第一の仕事だった。机に座り、まず空を見て季節の移り変わりを確認したものである。青い空に白い雲が流れている時は夏、そして空の色が透き通って枯葉が飛びようになり秋が訪れ、その枯葉が雪に変わるころには冬。冬は長かった。もう冬はたくさんだと思うころに、図書館の窓から見える空が急に明るくなり、木々の葉が芽吹いてくる。

図書館の隅に自分の机を確保すると、やっと一日の日課が始まる。おもむろに近くのキャフェテリアに行き、寝不足の頭をスッキリさせようとコーヒーを飲みマフィンを食べると、いよいよ一日の勉強が始まる。図書館のお気に入りの机は、勉強をするためのいわば「基地」のようなものであり、授業の時間が来ると必要な勉強道具を持って授業に出かけて、終わるとそこへ戻ってくる。さっそく出された宿題を、勉強基地で済ま

せてしまうのも学生の知恵だった。友人たちもそれぞれに「基地」を持っているので、本の貸し借りや宿題の相互チェックも楽に出来るところが便利である。そしてランチの時間となると、誰とはなく誘い合って、数人で出かける社交の場でもあった。

図書館は「癒しの場」でもあった。午後になり疲れた頭を、高く積まれた本の山の間でゆったりと休めたものである。タオルを敷いて、うつ伏せに頭を置くと、あつという間に夢の世界へ飛んでいった。30分ほどの休憩で頭をリフレッシュすると、再び勉強へ取り掛かる。この時の爽快感はなにも替えがたいものである。また日々英語だけの生活に疲れてしまうと、図書館にある日本語の辞書を持ってきて、ガラガラとページをめくったものである。懐かしい文字の列を眺めているだけで、不思議とやる気が湧いてきた。そんな時には、いつもは諦めてしまう難しい文献を読みこなすことができたりしたものである。

図書館での一日が終わりに近づいた頃、辺りをみまわすと、いつもの友人たちはもうすでに帰ってしまっていた。図書館から真っ暗なキャンパスを横切って学生寮まで一人で帰るのは危険であり、誰か一緒に帰る人がいないものかなと思案しているうちに、図書館の閉館のベルが鳴った。図書館に残っていた学生たちが一斉に外へ出ると、日中のような賑わいで、学生寮までの道を安心して歩いたものである。こうして一日が終わった。

# 時間持ちだった頃

文＝樽見弘紀

(たるみ ひろのり／法学部助教授)

先日、マンハッタン島のダウンタウンをグラウンドゼロ方面に歩いていたら、突然下腹が痛くなった。ラグやソファの専門店が並ぶ一帯で、わたしほこりに霞んで見える店員は皆、商うことに忙しそう。早くトイレを貸してくれる奇妙な店など見つかりそうになかった。それでもやっと、

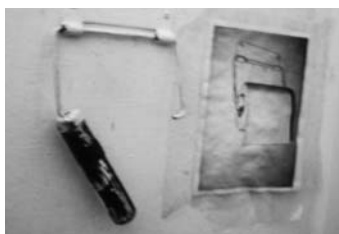
「うちは客にしか貸さない」

という家具屋兼コーヒーショップが一軒。

「すませることをすませたらすぐに客になるから」

ちょっと苦しい交渉が成立して、なんとか個室の人となった。

陶器に腰かけてほっとしたのも束の間、紙がない。ペーパーホルダーのワイヤーが誰かに引きちぎられたかに壊れているから、そもそもそこに紙はいつもないのである。ふと目をやると、ホルダーのとなりに緻密なテッサンで描かれたロール紙。泣き笑いしながら、デジカメのシャッターを押したのがこの一枚である。ピントがボ



ケているのは座したまま上半身だけひねった不自然な姿勢で撮ったせい、とご理解いただきたい。あと何十回も使え

そうな紙が巻き残っている様子が何と魅惑的なことか。今そこにある危機的な状況も忘れて、こんなインスタレーションで人々をわくわくさせる芸術家になりたい、と考えたこともある十代の頃の自分を思い出した。

いくらか年齢を重ねて、いつの間にか職業に憧れを抱く、といったことと疎遠になっていた。

思えば、東京で学生だった頃は色々な仕事に思いを馳せていた。だからといってこれといった理想や目標があった訳ではなく、ただ漠然とこのままどこかの会社に就職するのは厭だ、と考えていた。雑誌はポパイやJが、音楽はサザンやユーミンが、服装はハマトラやコンサバがキャンパスを席卷していた時代のことだ。地方の出の僕は、大学の主流派たることを早々に諦め、自宅の安ア

パートで、叔父がくれた一点豪華主義のカウチに身を沈めて、ひたすら本を読んだ。

実際、この自宅アパートでの鬱屈とした涉獵の日々は、まだ「ない」が、きっと「ある」はずの何か、つまりは自分自身の可能性の探求に余念がなかった稀有な一時期であった、と今に思う。

そんなある日、学生の身分でもやれる、てっとり早い手習いとして、ラジオドラマの脚本を書くことを思い立った。当時はまだ、FM局でのラジオドラマづくりが比較的盛んな時代だった。音声だけで人々のイマジネーションを喚起する作業は、その頃の僕にはとても素敵な仕事に思えた。放送局に知己などなかったが、目ぼしい番組の担当者をアボなしで訪ね、見ていただきたい、と不器用な「持ち込み」を敢行したのである。

もっとも、文字通り一夜漬けの習作が放送にのるのはもなく、ほどなくして原稿は散逸してしまっただが、このときの身のほど知らずの売り込みのお蔭で、その後20年近くもNHKのテレビやラジオから放送料（台本執筆料）をいただいて人並みの生活をさせて貰った。引越し、結婚、留学、そして親になること、といった人生のおもだったイベントは、ほとんどすべて「皆様の受信料」で賄わせていただいた恰好だ。

多少の紆余曲折を経て、こうして大学の教員になってみれば、いまはまだ何も「ない」、それだけに可能性が無限に「ある」学生と日々、隣り合わせである幸せに与っている。学生さんのなかには職業を選ぶべき時期が刻一刻と近づき、焦っている人も多いことと思う。何から始めたらいいものか、とりつく島がない、との焦燥感を持つかもしれないが、心配し過ぎることはない。たいかいたのことは、先達が自身の経験や知恵をどこかに記してくれている。だから、迷ったらまずは本を読もう。

「時間持ち」のあなたにお勧めなのは、日頃、馴染みのない本も手にとるだけとはって、斜め読みしてみること。新刊本好きの僕の最近の行きつけは大丸8階の三省堂の喫茶店である。購入前の本を5冊も6冊も囲って紅茶一杯で長居する喜び。見かけたら声をかけて下さい。お茶くらいはおごります。

# 「アヴェロンの野生児」のメタ話

文＝佐藤 淳

(さとう じゅん／経営学部教授)

「アヴェロンの野生児」は特に心理学の初期教育の題材として有名な野生児である。真っ赤に燃える炭をつかんでも火傷をしなかったり、100m離れた手の中の胡桃の音を聞き分けられたり、死んだ鳥の微妙な鮮度を嗅ぎ分けられたりといった逸話は知覚心理学の話を導くし、保護された後の感情・認知・コミュニケーション能力の伸長は発達心理学、また親代わりになった医師イタールの教育方針の立て方とその実践は教授学習心理学のよき事例ともなる。この話はなぜか学生の関心を大いに惹くようで、「寝た子も起きる」講義ネタとして私の十八番の一つでもある。

ただ、話をした半年後くらいの定期テストでこの部分に関わる論述式の課題を課すと、およそ4割くらいが「アヴェロンの野生児はオオカミに育てられたので…」とか、「オオカミに育てられたピクトール（野生児の名前）は…」といった講義では一切話していない余計な物語を書いてくる。実は「野生児」（人間社会から隔離された環境下にいた子ども）には何十例、何百例もあって、その中でたった一例だけ、A.ゲゼルがお墨付きを与えたというインドのアマラとカマラの姉妹が唯一「オオカミに育てられた」可能性が高いといわれているが、それだって少々怪しいのである。無論、フランスのピクトールにはそんな話はどの資料を見ても出てこない。

そこで、翌年から私は「アヴェロンの野生児はオオカミに育てられていない」ことをきちんと話すようにした。インドの姉妹とはまったく違う話だと。ところが、その年でも誤りは3割にしか減らなかったのである。講義に出てなかったのか、寝てたのか、他のことを考えていたのか、そんなところだろうと高を括っていた。ところがしかし、そのまた翌年に優れて熱心な一人の学生、いつも最前列に座って懸命にノートを取り、一度も欠席したことのないその学生の答案に、「オオカミに育てられた…」を見つけてしまったのである。答案の他の箇所はほぼ完璧だったにもかかわらず。

ここに至って漸く私は、この誤りが聞いていなかった

などというごく単純な要因から惹起されたものではなかったことを悟った。学生は聞いた上で誤っていたのである。そもそもこの場合、本来あるべき認知的情報処理は、1. 事前に何らかの生活経験から自成された「野生児はオオカミに育てられた」という認識を有している、2. 講義で提示された「育てられていない」という新情報を事前認識と照合させ、齟齬の解消を図る、3. 結果、事前認識を修正するか、ないしは新情報の否定により事前認識を保持する、というプロセスを経るはずである。この場合、根拠なく新情報が否定されることは考え難いから、問題は2. 「新情報と事前認識の照合」がなされないことにあると予想される。自成された誤概念はしばしば本人に明瞭にメタ認知されないことを考慮すると、学生は「講義で習ったこと」はそれとして、一方で「自成した知識」もそれはそれとして、たとえ両者が相矛盾する場合においてもそれらを共存させている可能性がある。すなわち、知識の二重構造化が起こっていることが予見される。それゆえ、上記の「オオカミ」の誤りは論述式の課題において既有知識が活性化された際に「自成した知識」が引き出されたもので、もし「育てられたか否か」を選択式で問うた場合には「講義で習ったこと」が引き出されて正答しえた可能性もある。学校で「習ったこと」が実生活に活きないとよく言われるのは、こうした情報処理様式の問題も一因にあると思う。「習ったこと」が直面する問題とリンクせず、適用することが出来ないのである。なぜそのような処理をするかは、心理学的に極めて大きな問題と考えている。

さて、後日談がある。ゼミの4年生がニヤニヤ笑いながら新書版の本を持ってきて「先生、書いてますよ。」と言う。「教育学入門」と題されたその本には「オオカミに育てられたアヴェロンの野生児は…」とあった。もちろん、この場合はその著者の偉さとご経験（年齢）に鑑みて、二重構造化ではなく単純な書字スリップである、としておこう。このレベルになるとそんな細かいことはどうでもいいのである。

# 図書館レポート 蔵書検索 (OPAC) のご案内

9月1日より図書館の蔵書検索 (OPAC) が新しくなりましたので、利用者の皆様にご案内いたします。  
この蔵書検索 (OPAC) は図書館のHPからもご利用できます。  
初めに、新しいOPACで利用できるメニューをご紹介します。



- ① **目録検索** 図書館にある資料を探ることができます。
    - a. 簡易検索 b. 詳細検索 c. 複合検索
  - ② **新着情報** 最近購入した資料の一覧を表示します
  - ③ **開館情報**
    - a. 図書館からのお知らせ
    - b. 各種図書館サービスの利用時間
    - c. 開館時間変更・休館の予定
- を表示します。

次は、各メニューについてです。

## 1. 資料を探す (Ex. 簡易検索で図書：『相続税の常識』を探す)

**簡易検索** 入力した言葉を含む、もしくはその言葉に関連する資料を探す

- ①最初の画面で【目録検索】をクリック
- ②『相続税の常識』と入力する
- ③〈検索〉ボタンをクリック

- ④目録検索結果一覧画面が表示されたら『相続税の常識』をクリック



②『相続税の常識』  
を入力

③〈検索〉ボタン  
をクリック

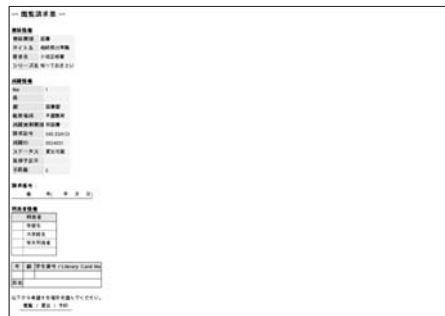
④『相続税の常識』  
をクリック

- ⑤図書誌情報画面が表示されたら〈請求票出力〉ボタンをクリック

- ⑥PC画面上部の印刷ボタン



をクリックして  
閲覧請求票を印刷する



⑤〈請求票出力〉ボタンをクリック

**詳細検索** いくつかの条件を指定して資料を探ることができます  
(Ex. タイトルに『法律』 出版社に『有斐閣』)

**複合検索** 1つの項目に複数の言葉を入力して資料を探ることができます  
(Ex. タイトルに『法律』 タイトルに『民法』)

検索した履歴は下の様な画面で表示されます。  
(OPACの利用が終わったら画面下の「検索履歴クリア」をクリックしてください。履歴が削除されます)

検索履歴						
再検索	NII検索	検索条件	一致度	和洋区分	図書	雑誌
<input type="button" value="検索"/>	<input type="button" value="NII検索"/>	キーワード=相続の常識	高	全資料	0件	0件
<input type="button" value="検索"/>	<input type="button" value="NII検索"/>	キーワード=相続税の常識	高	全資料	1件	0件

ここでは、過去に検索した条件を使用して以下の検索ができます  
【再検索】：もう一度、当館にある資料を検索できます  
【NII検索】：全国の図書館にある資料を検索できます(図書館のHPからOPACを利用した場合のみ使用できます)

## 2. 新着資料を探す

この画面を開くと最近購入した資料の一覧が自動的に表示されます。また、いくつかの条件で絞り込んで一覧を表示させることもできます。

## 3. 図書館からのお知らせと各種図書館サービスの利用時間、開館時間変更・休館の予定を確認する

(図書館からのお知らせと各種図書館サービスの利用時間)

(開館時間変更・休館の予定)

# 全集を読む楽しみ

文＝太田和宏

(おおた かずひろ／経済学部教授)

もう10年近く前になるが、『丸山真男集』（岩波書店、1995-96年）にざっと目を通したことがある。時代をリードした幅広い学術論文から、エッセー、追悼文にいたるまで、時期ごとに編集され、著者の文筆活動の全貌が知られて興味が尽きなかった。のちに『増補版・現代政治の思想と行動』（未来社、1964年）にまとめられる諸論文を、その時々々の知的営為に関連させて読んでみると、かつてこの著書を読んだときには理解しきれなかったもの、いわば分析的叙述と倫理的緊張の結合とでもいうべきものがおのずから伝わってきたのである。「昭和天皇をめぐるきれぎれの回想」（第15巻）や「『君たちはどう生きるか』をめぐる回想」（第11巻）などのエッセーで、おのれの知と倫理だけを頼りに時代と人生に正面から向き合う著者の姿勢をまざまざと知って、そうした思いを深めたのかもしれない。さらに、「文は人なり」というが、追悼文におけるほどその著者の人柄を如実に示すものはあるまいと思われた。丸山の場合、決して死者への美辞麗句に流されること

なく、その人物の本質的な長所と愛すべき弱点を端的に捉え、温かくも鋭い人物評となっているのだ。ハーバード・ノーマン（第7巻）と竹内好（第10、12巻）、そしてまた師である南原繁（第10巻）に向けて書かれたものが、ことのほか美しい。ヒューマニティーとは何か、ということを追われる思いがする。

読みながらつづく感じ入り、その後私自身の生き方の指針としたことがある。神に愛でられし人というのは、稀有ではあるが、確かにここに存在しているということ。ワーグナーのような芸術家には必ずしも当てはまらないかもしれないが、こと社会科学に関するかぎり、学問的成果と著者の人格は密接な関係にあるということ。そして、親しく接することのできる師や身近な先輩たちのなかに、学問的にも人間的にも心から尊敬できる人物を持つことは、社会学者にとってこの上ない幸いであること。

いずれ、病でもえて、時間をたっぷり持ったとき、この全集を再びゆっくりと味わってみたいと思う。

## 編集後記

- ちょうど一年前の予告（167号）を裏切らず、今年も村治佳織のコンサートに行ってきました。演奏を終え、観客に向けられるあの「表情」（一言で表現するならば、それは「大変、贅沢な笑顔」）に、世界が彼女を認める理由がわかる気がします。
- 図書館システムがリニューアルしました。OPAC機能も充実しており、以前に比べてかなり使いやすくなりました。読書の秋と相俟って、多くの方々の図書館利用をお待ちしております。それでは、次号まで「ヤーサス」（さようなら）。

北海学園大学附属図書館報 図書館だより 第26巻3号（通巻171号）

本館 〒062-8605 札幌市豊平区旭町4丁目1番40号 工学部図書室 〒064-0926 札幌市中央区南26条西11丁目1番1号  
TEL (011) 841-1161（本館内線）2273・2274・2275（工学部内線）7813・7814 印刷所：(株) アイワード